

ドキュメンタリー映画、『キューバ・リブレ ラップで闘う』

原題：『自由キューバ万歳—ラップは戦争だ—』

番組制作者はだれか

このドキュメンタリー映画、『キューバ・リブレ ラップで闘う』、原題：『自由キューバ万歳—ラップは戦争だ—』は、2015年米国のパシオン社により、ジェッシー・アセベドとシルビート“エル・リブレ”の共同監督で制作されたものです。アセベドは、メキシコ出身のドキュメンタリー制作者で現在米国に在住。シルビートは、ヒップホップ歌手で、キューバのシンガーソングライターのスーパースター、シルビオ・ロドリゲスの息子ですが、現在フロリダのタンパに在住しています。



このドキュメンタリーは、8月9日、NHKのBSで放送されました。恐らくは数十万人の人が見たことでしょう。また、再放送も行われるものと思われます。

NHKの同番組の案内には、このように記されています。

「アルドとビアンとの2人は、CDを手作りして街頭で配り、秘密のゲリラ公演を地方の町で開くなどして音楽活動を続けている。カリブのこの国の住民なら誰もが知る存在だが「固定観念を打ち破れ」と呼びかける彼らのラップを聴いていた一家が長期の拘束を受けるなど、当局の厳しい圧力に直面している。ビアンと妻の間にも初めての子が…“理由ある反抗”は続けられるのか？キューバの断面を鋭く切り取った歌と生きざまのドキュメント」（もっとNHKドキュメンタリー）。

放送後、視聴者からは、このページには、次のような感想が寄せられています。

「この世の中、時代に今だにこんな世情があるのか？」

あまりにも悲惨で残酷でなんとかしてもっと夢をもち希望の持てる国にしてほしい。

世界中の国が力を合わせたら出来るのではないのでしょうか？

これからを担う若者のためにも！投稿者：tama／50代／女性」

「これがrapの原点なんだなと思った。世の中の不平不満をrapする。本当カッコいいよ。この二人は、日本でもCD買えないかな。日本の若者にも是非見てもらいたい。投稿者：Dai／40代／男性」

この感想から見れば、制作者の意図は果たされたようです。しかし、実際、キューバ社会の実態はどうなのでしょう。どういう時代背景からこの奇怪なドキュメンタリーが作成されたのでしょうか。制作者の実際の意図はどこにあるのでしょうか。以下、ひとつひとつ見て

みましょう。

キューバにおけるラップの発祥と展開

ラップ自身の世界的な歴史も深くはありませんが、キューバでは1995年にラップの若者グループが結成され、一定の活動を行うようになりました。当時も、ラップ特有の現状批判はありましたが、90年代のキューバ経済の困難を反映して、革命が追求してきた黒人に対する人種差別、貧困一掃が依然として達成されていないという、むしろ革命を推進する立場からの批判でした(14.12.11, *Foreign Policy*)。しかし、次第にキューバの困難な生活状況を反映した厳しい批判的な歌詞が歌われるようになり、キューバ政府は、2002年キューバ・ラップ局を設置し、毎年ラップ・フェスティバルを支援するとともに、ラップが度を過ぎた過激な政治活動にならないように規制するようになりました。しかし、一方、同年、ハバナのケイソン米国利益代表部代表(ブッシュ政権下)は、キューバ国内の反体制派に金銭や物資の提供、利益代表部における反体制派との会議の開催、地方の反体制派への訪問、反体制派の活動の結集の訴えなど、露骨な内政干渉を強めるようになりました。2003年には、反体制派が何度もハバナの米利益代表部の会合に参加し、参加者をキューバ政府が、逮捕するという事件が続きました。この年2月、このドキュメンタリーの主人公、ロス・アルデアーノスがプロデビューしましたが、最初の公演は、観客5名という惨憺たるものでした。彼らは、単なる過激な言葉を操るラッパーにしか過ぎなかったのです。

米国、音楽を利用した対キューバ秘密工作開始

2004年になると、キューバ内務省の公安、ラウル・カポーテに、米国諜報機関から接触があり、スパイの勧誘を受けました。カポーテは、キューバ政府の方針により二重スパイとしてそれを受け入れ、米国諜報機関からソフト・クーデターの訓練を集中して受けました。カポーテによれば、それは、ジーン・シャープの破壊活動教本に基づくものでした(ジーン・シャープ『独裁体制から民主主義へ—権力に対抗するための教科書—』瀧口範子訳(ちくま学芸文庫、2015年))。



同年4月、ブッシュ政権は、米国の反キューバ過激派組織「自由キューバ支援委員会」の報告にしたがって、キューバ締め付け強化策を発表。それらは、キューバ国内の反政府派勢力に資金を援助する、キューバを訪問する第三国のNGOを通じてキューバ国内で反体制派を支援する、キューバの反体制派の海外留学を支援する、というものでした。



グリーンワルド (左) とカポーテ (右)

2005年、カポーテは、CIAの要員、レネ・グリーンワルドから、「キューバの反体制派を勧誘するために、音楽を利用し、様々な表現で反政府批判を行うよう」指示を受けました(17.12.27 *Cuba Resumen*)。一方キューバ政府は、米国がキューバの反体制派に財政的に支援していることを把握しており、フィデル・カストロ議長は、米国国際開発庁(USAID)*が、米国の亡命キューバ人グループ「民主主義支援グループ (Grupo de Apoyo a la Democracia) に500万ドル援助したこと、1996年以来1億6000万ドル渡したことを非難しました (*Cuba a mano* No.20/05)。

*USAIDは、米務省参加の機関で米務省の指示により海外での米国支援活動、反米政府・民間活動の転覆・抑圧に財政支援を行っています。

破壊文化活動のプロ、ボジックの暗躍

セルビア人のラジコ・ボジックが、キューバのビデオ・ジョッキーのアドリアン・モンソンの仕事に入ったのはこの年で、ボジックはセルビアの国際的に有名なEXITフェスティバル



のプロデューサーと名乗り、モンソンにキューバのロティージャ・フェスティバルへの支援を申し出ました(14.12.26 *Nuevo Herald*)。

翌2006年、CIAのグリーンワルドがハバナに帰ってきて、カポーテに「キューバでラップ協会を作るように」言い、非常に過激なことばのラップ音楽のCDを置いていきました。この年から、キューバ国内の最大のラップ・イベントである、フェスティバル・ロティージャにボジックとEXIT財団がUSAIDの財政支援を始めました。ボジックは、2000年セルビアの大統領選挙に際し、ミロシェビッチ前大統領に反対する世論の扇動のため、ラップ音楽作戦を行った経験をもっていました。

同年7月、カストロ議長が病に倒れ、ラウルがすべての権限を委譲され、政府を指導するようになりました。8月グランマ紙には、「フィデルが死亡すれば、米軍の緊急展開軍をキューバに派遣するという米国政府の企図が、敵の計画の中にある。その危険についてフィデルはその声明の中で警告している」と報道し、両国の緊張関係が高まりました。

そうした中、12月、ニューヨーク・タイムズ紙は、記事でアルデアーノスを紹介。この時、アルデアーノスは、「俺たちは、革命を悪く言う歌を録音していない。俺たちは、どんな政治制度も、ここキューバの制度も米国の制度も支持しない。俺たちは自由を欲しているのだ。俺たちが歌うことは、人々は話すことができないことだ」と報道し、キューバ社会に反政府派のミュージシャンがいることを報道しました。



2007年6月、ブッシュ大統領は、チェコのプラハで、「世界の独裁制国家、ベラルーシ、ビルマ、キューバ、北朝鮮、スーダン、ジンバブエの反体制・民主主義活動家と個人的に会っている。キューバ人は自由に絶望しており、キューバは移行期に入っている。キューバでの自由選挙、自由言論、自由議会を主張しなければならない。暴政のもとで苦しんでいる人々に、『われわれは、圧政者を決して許さない、われわれは、常にあなた方の自由を支持している』とメッセージを送る」と述べました（*US White House Home Page, June 6, 2007.*）。

9月になると、マイアミで少なくとも10名のキューバ系アメリカ人記者らが、所属する新聞社やテレビ局に無断で米国政府機関から謝礼金を受け取り、キューバ向けプロパガンダ番組作成に協力していたことが地元マイアミ・ヘラルド紙の報道で明らかになりました。取材活動に対する謝礼は記者によっては数年間で17万5,000ドル（約2,000万円）に達したといます。これらは、USAIDから出た金でした。

同年10月ブッシュ大統領は、強硬な干渉主義的反キューバ演説を行い、キューバ国民や、兵士、警察、政府職員、青年に蜂起を呼びかけるとともに、「自由キューバ基金」への拠金を第三国に提唱しました。ブッシュ大統領は、演説を「自由キューバ万歳」と結びました。1868年のスペインからの独立闘争の際に独立運動の闘士によって使われたこの言葉を、カストロ体制の打倒の標語に使用したので、フィデル・カストロ前議長は、「ブッシュは、いつから独立運動の闘士になったのか」と反論しました。ラウル政権下のキューバを不安定と見て、米政府の対キューバ攪乱活動は、一段と強化されていくのです。

2008年になると、CIAは、キューバに大量のケイタイ電話を持ちこみSNSを作り、CIAの作戦に一般市民を動員する計画を始めました。USAIDは、連邦会計検査院の指示を受け、総会で2007年度対キューバ予算4,500万ドル（06年は1,300万ドル）の使用について、目立たない方法で新たに、電子機器をキューバの送ることを決定しました（08.05.07, *Los Angeles Times, 08.05.30 Granma.*）

4月には革命広場で反体制派、「白い貴婦人」*の10名が、早朝6時半から3時間にわたり、収監中の政治犯の釈放を求めデモを行いました。治安警察が、止めるように説得するも聞かず、婦人警官が動員され、バスに乗せて、それぞれに自宅に帰しました。「白い貴婦人」は、



数日前に過激派のフロリダ選出のキューバ系米国人、イレアーナ・ロス＝レティネン議員から、激励と支持の電話を受けていました（この会話の録音の一部がキューバTVで放映されました）。

「白い貴婦人」は、USAIDから資金援助を受け、デモ参加者には日当が15CUC（外貨、約1,800円）**支払われていました（08.04.22 *La Jornada*, 14.09.28 CD）。クリントン国務長官は、「白い貴婦人の勇気と強い意志に感動した」と述べていますが（クリントン『困難な選択』日本経済新聞社訳（日本経済新聞社、2015年）、自らが資金援助したグループが行うデモに感動するというのも、自己撞着の感があります。

*「白い貴婦人」については、拙稿「民主主義の国、米国の汚い策謀、ウィキリークスが暴露」2011年9月11日を参照ください。

**15CUCは、余り高額とは見えないように思えますが、公務員の平均月額賃金が25CUCからすると、かなり高額なものです。

さらに5月には、キューバは、TV番組で、米利益代表部主席マイケル・パームリーが、キューバの反体制派の人物に金品を渡して支援していると非難。パームリーは、マイアミに本拠を置く法的救援財団(Fundación Rescate Jurídico)を通じて資金を受け取り、それをマルタ・ベアトリス・ロケ（住民社会通信ネット）、ホセ・ルイス・ガルシア（全国市民抵抗戦線）、ラウラ・ポジャン（白い貴婦人）などの反体制派に渡したものです。キューバ政府は、ビデオ、証拠書類を示して非難しました。米務省スポークスマンのシーン・マコーマックは、詳細は知らないが、利益代表部は国際法に従って行動しているとこれを否定しました。しかし、パームリーが、彼らと直接会ったり、メールで連絡したり、電話連絡を取っていた証拠がキューバ政府より示され、キューバ側の非難が間違っていないことが明らかになりました（08.05.21 *La Jornada*, 08.05.22 *Granma*）。パームリーの行動は利益代表部に許されている行動基準から全く逸脱したものでした。

また、ブッシュ大統領は、ハバナにあるアメリカの利益代表部に来たベルタ・ソレル(白い貴婦人代表)など3名の反体制キューバ人とTV電話で45分間話し、「キューバに変化はなく、キューバ人が自由になるまでアメリカ政府の変化はない、現在の変化は、化粧に過ぎない」と、政府反政府活動を激励しました（08.05.08 *AP*）。

オバマ政権、キューバ攪乱行為を一段と強化

オバマ米国大統領候補は、「カストロの引退は、キューバ史の暗黒時代の終わりを作るものである。フィデル・カストロの退任は、必要な第一歩であるが、自由をキューバにもたらすことにおいては、悲しいが不十分である。キューバの未来は、キューバ国民によってであって、反民主的な後継体制によってではない。キューバ国民に長期間否定されている基本的な自由のために立ち上がったことで不当にも収監されているすべての政治犯の即座の釈放は、過去との重要な断絶となるであろう。これらの英雄を釈放する時期だ。キューバの指導者が、意味ある民主的な変革に向かってキューバを開放し始めるならば、米国は国交を回復し、経済封鎖を解除する準備をしておかなければならない」と述べ、ブッシュもオバマも対キューバ敵視観では大差がないことが示されました。むしろ、秘密作戦によるキューバ攪乱作戦は、オバマ政権の時、ブッシュ政権の時よりも増大したといわれています（Willim M. LeoGrande & Peter Kornbluh, *Back Channel to Cuba*）。



2008年、オバマ政権の新国務長官となったヒラリー・クリントンは、スマート・パワー政策を採用することを宣言します。スマート・パワー政策とは、「さまざまな状況に応じて、複数の道具—外交的、経済的、軍事的、政治的、法的、文化的道具—の正しい組み合わせを選ぶ」政策です（ヒラリー・クリントン『困難な選択』日本経済新聞社訳（日本経済新聞社、2015年）。そして、キューバに変化をもたらす最良の方法は、「カストロ独裁政権は、OAS憲章に違反する人権違反を行っているが、聞く耳をもたないので、外の世界の価値観や情報、物質的な快適さを国民に経験してもらうことである」と断定しています（同上）。そこから、対キューバ政策でUSAIDを使ったさまざまな文化的諜報活動が行われたのでした。1,996年から2014年までの18年間にUSAIDは反キューバ攪乱活動に1億5,000万ドルを費やしました（14.12.29 *Liberation School*）。

USAID、社会・文化活動に侵入

そこで、オバマ新政権下で米国務省は、USAIDを使ってキューバの「市民社会支援計画」を作成し、いろいろな計画を実行し始めます。USAIDは、以前から行っていたキューバの既存の反体制活動を支援することの他に、新たに、社会・文化活動を通じて反政府感情を扇動する三つの政策を決定しました。それらは、①ラッパーを通じての若者の反政府活動の扇動、②スンスネオ SNS を通じての社会の攪乱活動、③HIV 予防啓蒙活動を通じての若者の反政府活動家の養成でした（USAID, *Review of USAID'S Cuban Civil Society Support Program*, December 22, 2015）。



こうして米玖関係が緊張して展開する中で、アルデアーノスは、ラップ「オレンジはだめになった」を作成し、歌いました。この歌の中で、アルデアーノスは、「カストロの勝利は破産した。崇拜と社会主義社会はうんざりだ。俺が勝ってもカストロのおかげとはしないでくれ。アメリカの夢を求めて死ぬ方が、キューバの悪夢を見て生きているよりましだ。人権は何も意味しない。こうした状況はもはや我慢できない。おまえたちは、だまされている。この国は刑務所だ」と厳しく体制をこきおろしました。この内容は、USAID の目的にかなうラップ・ミュージシャンをじっと物色していた USAID の目的に適ったものでした。

アルデアーノス、USAID の手中に陥る

2009年の初め、USAID の下請け会社クリエイティブ社(Creative Associates International)が、反政府活動に若者を利用するためにアルデアーノスに照準を定め、ボジックをキューバに送り込みました。このころ、アルデアーノスが歌う曲の中に、CIA のグリーンワルドがカポータに渡した CD の中の 2 曲が歌われるようになりました (Raul Capote, 17.12.27 *Cuba Resumen*)。ボジックは、アルデアーノスには、USAID と働いていることは言わず、2年間は、アルデアーノスは USAID の計画の中で動いているとは気づかなかったようです。



クリエイティブ社の目的は、ヒップホップを通じて若者の間に社会変革のネットを構築することでしたので、アルデアーノスのデュエットの一人、アルドと契約しました。アルドを支援し、政府と対決する若者を増やす目的です。これは、ボジックがセルビアでミロセビッチを打倒した経験から学んだものでした。

4月、米国の利益代表部のジョナサン・ファラーは、国務省宛に、若いブロガー、ミュージシャン、画家などを勧誘し反政府行動を取らせるように提案しました (Willim M. LeoGrande & Peter Kornbluh, *Back Channel to Cuba*)。こうした策略が、国務省、USAID の全面的な対キューバ攪乱工作として進められていくのです。

同年6月、アルドは、カンデラリアで 150 名のファンの前で過激な歌詞を歌い、終わりごろ過激な歌詞を巡って警官と議論となりました。ボジックたちは逃げだしましたが、アルドとカメラマンは、逮捕、拘置されました。USAID の最初は文化的に始めて、次第に政治的内容にしていく作戦が実を結びはじめました。

同年9月、クリエイティブ社は、一計をめぐらし、コロンビア人歌手フアネス（ラテンポップスのスーパースター）、のキューバコンサートを企画し、そこでアルデアーノスをジョイントさせ、アルデアーノスの名前を一気に国内外で高めようと図りました。フアネスは、コンサートにグループを招待しませんでした。フアネスは、コンサートでアルデアーノスに感謝の言葉を述べました。アルデアーノスのマネージャーは、その後、彼女のホテルの部屋に彼らを招待し、アルドは感動してはしゃぎました。フアネスは、彼のホテルでアルド、エルベ（ピアノ）、シルビートと写真を一緒にとり、アルデアーノスは、国際的な歌手となったと感じました。もともと、これはボジックのシナリオ通りでした。1週間後アルドは、パソコンの不法所持で逮捕されます。クリエイティブ社のキューバのエージェント、アドリアン・モンソンは、そのことをボジックに連絡。シルビートの父親のキューバの大御所歌手のシルビオ・ロドリゲスは、この真意を理解せずに、アルドの釈放に奔走し、パソコンは自分がアルドに贈ったものと警察に説明しましたが、当局はこのパソコンを調べた結果、アルドとボジックの交信記録がありました。また、11月ボジックが、キューバに出国したところ逮捕され、持っていたパソコン、メモリーなどが押収され調べられ、ボジックはその後すぐキューバを離れました。しかし、キューバ当局は、このパソコンの中に、ボジックとクリエイティブ社の交信記録を見つけ、USAIDの陰謀を解明したのです（14.12.12 AP）。



コロンビア人歌手フアネス

USAIDの攪乱行為発覚

すると、12月キューバ政府は、米政府の開発政策社（クリエイティブ社）のキューバ担当請負社員、アラン・グロス、を、別のキューバの反体制勢力に資金・物資の支援を行っていることから、CIAの工作員と認定し逮捕しました（14.12.12 AP）。米国政府は、アラン・グロスが米国の諜報員であることを否定しましたが、キューバ政府は上記のアルドのパソコンの記録などから十分な証拠を握っていました。なお、アラン・グロスは、5年後の12月17日、米国・キューバ両政府が国交回復を進めることで合意した日、信頼醸成の第一歩として、20年余拘束されていた米国諜報員ロランド・サラフとともに、米国政府が1998年以来拘束していたキューバの諜報員3名と交換で釈放されました。

ボジックがキューバに出国できなくなり、またアラン・グロスも逮捕拘禁され、アドリアン・モンソンは、キューバで唯一のクリエイティブ社の契約社員となりました。しかし、モンソンは、キューバ国内を旅行し、200名の社会意識を持った音楽関係の青年を見つけ、Talento Cubano netを作ります。これらの青年たちを通じて反政府感情を扇動しようというものです。モンソンは、この計画のため30,000ドルUSAIDから受け取りました（14.12.26 *Nuevo Herald*）。



2014年12月釈放されたグロス

USAID は、このアルデアーノス計画と並行して、2009 年 4 月から「SNSネオ」（キューバ版ツイッター）計画を遂行します。これは、キューバ国内にツイッター・ネットワークを作り、様々な反政府情報を流すというものです。「キューバ版ツイッター」とも渾名された SNSネオは、少なくとも 40,000 人の利用者を獲得したものの、2012 年 6 月に予告無く突然中止されました。AP 通信によると、計画への補助金が打ち切られたために終了したとされています。

また、USAID は、同年 11 月クリエイティブ社を通じて、コスタリカ、ベネズエラ、ペルーで若者の契約者を募り、キューバに HIV 予防セミナーを開催するために 12 名を観光客を装って派遣しました。クリエイティブ社は、キューバのサンタクララ他、61カ所でセミナーを開催しました (14.08.04 *US News*)。2011 年暮れには、これらの若者の契約社員は、キューバを出国しました。この計画は、結局キューバの治安当局が若者たちの旅行費用が USAID からのものと気づき、失敗に終わりました (14.08.04 *The Tico Times*)。



翌年の 2010 年 1 月、USAID の契約社員モンソンが、警察当局に尋問されます。しかし、逮捕まではいきませんでした。クリエイティブ社は、条件も整い、キューバの音楽活動に潜入することを決定しました。モンソンは、一連のキューバ人ミュージシャンのグループを連れてセルビアに行き、トレーニングを受けて帰国しました。2010 年 7 月、アルデアーノスは、セルビアの EXIT フェスティバルに参加し、4カ月滞在しました。この折 USAID は、キューバ LGBT 問題に取り組んでいるキューバ全国性教育センター (CENESEX、所長は、ラウル・カストロの娘、マリエラ・カストロ) *にも、触手を伸ばし、ボジックはマリエラ・カストロと会い、2 名をこのフェスティバルに招待。CENESEX は代表 2 名を派遣しましたが、CENESEX の活動分野とは関係がなかったということで、その後 CENESEX は、クリエイティブ社との関係を断ちました (14.12.12 AP)。



マリエラ・カストロ所長

*CENESEX については、拙稿「マリエラ・カストロさんに聞く一前進する女性の権利と LGBT」『女性のひろば』2017 年 6 月号を参照。

アルデアーノスの反政府行動ピークに

同年 8 月、アルデアーノスは、ハバナ市東部のロティージャ・ビーチで開催されたフェスティバルに初めて招待されました。このフェスティバルは、1998 年から開始され、キューバ

で最大エレキ・ミュージック・フェスティバルです。USAIDは、フェスティバルの開催費用に15,000ドル寄付しました。フェスティバルが政府予算以外のいろいろな形の寄付金でなりたっていることを知った上で。この年のフェスティバルには3日間で15,000人が



参加しましたが、アルデアーノスは、壇上で「自由キューバ万歳」歌いました。その歌詞の中には、「真の自由なキューバを実現しよう。『社会主義か死か』という計画にはもうあきた。共産主義がなんというのだ。医療はみんなが無料なので俺は診療所には行けるが、外貨ショップには行けない。俺には安く国内ペソで払って、俺からは外貨ペソで高く取り上げる。払われる賃金なん

て馬鹿にしている。鼻高ピノキオ（フィデル）はもう役立たずとなり、人々を騙している。しかしだれもそれを言わない。警官は、憎しみで俺を罰しようとする、体制の犠牲者だということが分かっていないバカ者だ。自由キューバ万歳」と指導者と体制を罵倒しました。ここでアルデアーノスがいう「自由キューバ」とは、米国のブッシュ、オバマ政権がいうものと同じ内容で、「米国の支配からの自由キューバ」ではありません。

確かに、キューバの医療制度は、困難を抱えており、レイサ・イニゲス教授がいうように、「天国でも、地獄」でもありません。医薬品が不足していますし、医療機械も故障で使用できないものも少なくありません。病院での「心付け」も横行しています。医師の海外派遣サービス輸出で医師不足もあります。しかし、ドキュメンタリーでピアンの妻が出産する場面がありますが、この費用はすべて無料です。1,100万の国民すべてが、基本的に無料で医療サービスを受ける制度は、アルデアーノスがあこがれる米国にはないものです。なによりも、最初の人々の命の尊重という点で重要な、乳児死亡率は、2017年度キューバは4.1/1,000人で、米国の5.9よりも優れています。

賃金の面でいいますと、確かに、公務員（勤労者の70%）は、取得賃金では、現在、ハバナ市などの都市で必要な生活費の3,000~5,000ペソ/月には4分の1程度しかカバーできません。残りは、海外からの家族送金、特技を生かしたアルバイト、サイドビジネス、勤務先の売り上げのごまかし、品物の横流しなどでカバーしています。しかし、政府はこのことを良く理解しており、90年代の経済危機を乗り越える過程で発生したこの深刻な問題を解決するために現在、自営業、請負業の増加、企業の賃金体系の改善もおこなっており、市民も、政府も懸命の努力を行っているところです。海外からの内政干渉資金を受け取り、良い生活をしながら、このことを批判する資格はありません。

また、このフェスティバルに向かって、ボジックは、キューバ・新トロバ運動の大御所の一人、パブロ・ミラネスの娘、スイレン・ミラネスに接近し、交流をもつようになりました。USAID は、パブロ・ミラネスが、近年政府批判を行っているのを見て、フェスティバルに出席し、聴衆に新たな息吹を与えるように考えたものです。しかし、キューバ当局は、フェスティバル前にその計画を知っており、スイレン・ミラネスパブロ・ミラネスの娘に「好ましくない人物」と付き合っていると警告し、この計画は頓挫しました（14.12.11 AP）。



ミラネス親子

その後、アルデアーノスは、セルビア、コロンビア、グレナダ、スペインと公演旅行を行い、最後に 11 月フロリダのマイアミにおいてシルビートとともにリサイタルを行いました。

オバマ大統領は、USAID によるキューバを訪問してキューバ人反体制に資材、資金を与える代理人のキューバ渡航の一次中止を解除しました。昨年 12 月 3 日のグロスの逮捕以来中止されていたものです。USAID のキューバ支援活動経費は 2009/2010 年会計年度は 45 万ドルに達しました。

12 月、オルギンで、マルコス・マイケル・クルス、アントニオ・リマ・クルス兄弟が、アルデアーノスの歌を自宅のテラスで聞いたかどで逮捕され、不当な逮捕を兄弟の母親アディス・ニディア・クルスが涙ながらに訴えるシーンがドキュメンタリーに挿入されています。実際に起きたことは、クルス家は、反体制組織のキューバ人権告発委員会（CRDHC、2007 年設立）に属しており、良く知られた反政府活動一家です。家の道路に面した壁には政府批判の言葉が書き並べられており、クリスマス・イブの夜は、道路に面した 1 回のテラスで異常に高い音で、アルデアーノスの過激なラップ、「自由キューバ万歳」の CD をかけ、踊りました。当時、キューバでは騒音防止条例があるものの適切に守られていないという議論が高まっており（08.06.06 *Granma*、11.05.18 *Granma*）、近所の人々が、その騒音と政府や社会を一面的に罵倒する内容に腹を立てて当局に取締りを依頼したものとされます。騒音と体制批判で近所の人々を挑発し、警官の取り締まりには過激に抵抗し、警察の過剰な取り締まりを引き出し、人権侵害を海外のマスコミに訴えるという筋書だったのでしょう。



クルス兄弟

政府に反対する行動は、キューバでも違法でもなく、無条件に認められなければなりません。憲法と国内法に沿ったものでなければなりません。外国から資金援助を受けた活動は、内政干渉と主権の侵害を許すことになり、いかなる国でも、いかなる国からのものでも、許されるものではありません。

キューバ政府、文化面で緩和政策を進める

2011年1月14日、オバマ政権は、対キューバ経済封鎖緩和策を発表しました。内容は、①文化的影響をキューバ国民に与えることが目的として、学術、文化、宗教関係の人的交流を増やす。②すべての米国人が、3か月に500ドル（年間2,000ドル、以前は親族に限り3か月に300ドル、年間1,200ドルまで）などです。目的は、人的交流を深めて、内側からキューバのカストロ体制を崩壊させようというものでした。この年、オバマ政権は、機会あるごとに、「キューバ経済の市場開放が不十分であり、社会主義は時代錯誤であり、キューバは60年代に後戻りしている」（9月、オバマ大統領）、「キューバ国民は、これまで50年にわたって、自由を享受してこなかった。現在、世界のどこでも民主化運動が見られる。キューバにも同じことが起きる時が来たのだ」（9月、オバマ大統領）と、キューバの内政問題を一方的に裁断して批判しています。

4月には14年ぶりにキューバ共産党第6回大会が開催され、党大会と、8月の国会で承認された「党と革命の経済・社会政策路線」の実施状況を点検するために、「路線の導入と発展のための政府常設委員会」が設置され、定期的に会議がもたれるようになりました。また、政府高官の汚職追及も強化されました。一方、文化政策の柔軟化進み、ギジェルモ・カブレラ・インファンテやビルヒリオ・ピネエラなど、かつて反革命的と批判された作家の復権も進みました。

一方、過激な反政府活動へのキューバ治安当局の警戒も厳しくなりました。3月には、ハバナ人民裁判所が、USAIDの契約社員アラン・グロスに禁錮15年の判決を下しました。アルドは、ヨーロッパ、米国、メキシコで公演し、4月に帰国します。一方、モンソンが4月にマイアミを訪問し、帰国しますが、帰国後、逮捕され、パソコン、メモリーが押収されました。それにより、USAIDの計画の全容が暴露されました。シルビートは、クリエイティブ社と関係をもちながら、国内で反政府活動をすることが難しくなり、米国のタンパに移住しました。

2012年になるとキューバの自営業の数も増え、経済活動人口の10%程度となり、社会もかなり開放感を感じるようになりました。10月には、新しい出入国法が制定され、海外滞在期間が24カ月以内であれば、原則として、出入国が自由になりました。

一方、スンスネオ計画は、この年、米政府の予算が十分とれないことから、4万人程度のユーザーを抱えるようになりましたが、中止されました。アルデアーノスの活動は、治安当局と問題を起こしながら続けられました。

アルデアーノス、モンソン米国に亡命

2013年2月23日、アルデアーノスは、ハバナ市のサロン・ロサード・デラ・トロピカルで演奏したあと、アルドは、米国に亡命しました。その後アルデアーノスは、タンパ、ラスベ

ガス、マイアミで公演を行いました。

9月には、米玖国交回復に向かって、米国政府から、キューバ政府への接触が開始されました。その後、カナダ政府、バチカン政府の仲介で両国の交渉が秘密裏に進みます。

9月、ジャズピアニストで、インテルアクティーボのバンドマスター、ロベルティコ・カルカセスが、米国利益代表部前で行われた、米国で拘留中の5人のキューバ人の釈放要求のコンサートで、

「もっと通信の自由が欲しい、例えば大統領の直接投票。党员も反体制も同じ権利がある。経済封鎖も自己封鎖も止めよ」と歌い、翌日、無期限の公演禁止となりました。すると大御所のシルビオ・ロドリゲスが介



入し、場所をわきまえずに歌ったことは良くないが、内容は個人の表現の自由だ」とロベルティコを支持し、自らのバンドで共演させました。ロベルティコは、文化省の役人と会談し、場所が不適當だったと誤りを認め、制裁が解除されました。ロベルティコは、政治批判、社会批判を、USAIDとは関係はなく行い、現在でもキューバを居住地としつつ、米国など海外でバンド・インテルアクティーボを率いて演奏活動を行っています。ロベルティコの政治・社会批判は体制を崩壊させようというのではなく、またUSAIDから財政的支援を受けているわけでもなく、ここにアルデアースとの大きな違いがあります。



アドリアン・モンソン

12月には、モンソンが、米国に亡命しました。

AP通信、USAIDの対キューバ陰謀策を暴露

2014年4月3日AP通信が、USAIDがキューバに対して、ツイッター、SNSスネー工作、HIVセミナー計画、ラッパー懐柔計画を行っていることを暴露し、大きな国際的な反響を呼びました。キューバ政府は、USAIDのツイッター工作を内政干渉として厳しく批判しました(14.04.04 G, 14.04.07 CD)。この時、収監中のアラン・グロスが、非人道的扱いに抗議し、釈放を要求し、ハンストに入りました。AP通信のスクープ・ニュースの印象をそらそうとするものでした。4月9日キューバ政府は、アラン・グロスと3人のキューバ人諜報員服役囚との交換を申し出ると、11日アラン・グロスは、ハンストを中止しました。

この年、アルドは、亡命先のマイアミで、「ロティージャ・フェスティバルを記念して」と名付けてさまざまな公演活動を行っています。

年末の12月17日、米玖両政府が、国交回復交渉を進めることを発表し、信頼醸成の第一歩として、米国政府は、1998年以來拘束しているキューバの諜報員3名、ヘラルド・エルナンデス、ラモン・ラバニーニョ、アントニオ・ゲレーロの釈放を、またキューバ政府は、2009年から拘束している米国の諜報員アラン・グロス及び20年余拘束されているキューバ人二重諜報員ロランド・サラフを釈放しました。

米玖国交回復進めるも、米国の内政干渉終わらず

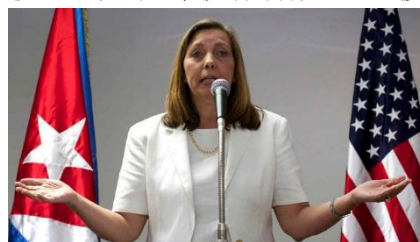


ジェイコブソン代表とロドリゲス外相

2015年1月リーヒー米国上院議員を団長とする米議会民主党代表団がキューバを訪問し、ロドリゲス外務大臣やオルテガ枢機卿、その他キューバ側関係者と面会し、十数人の反体制派とも面会しました。1月22日米玖関係国交回復交渉がハバナで行われましたが、ジェイコブソン代表は、国際関係の原則を無視し、キューバの7名の反体制派を朝食会に招きました。

また、ジェイコブソン代表は、USIDが資金援助している、若手ブロガーのヨアニ・サンチェスの自宅を訪問しました。一方では、米国側は、「50年間の反体制派への支援は、キューバ国民の中に根を下ろさなかった。これから、検討しなければならない」と述べ、言行が不一致でした。キューバ政府は、「米国政府は、キューバ国内の『民主化勢力』への支援を継続することを表明しているが、これは、国際法、国連憲章に違反する行為である」と原則的立場を譲りませんでした。しかし、米国政府の反対派との接触は、その後も4月の米州首脳会議本会議の際にもオバマ大統領は、首脳会議の前に、パナマに来ていたキューバの反体制派と会い、「米国は、常に反体制派を支持する」と述べたり、8月にはジョン・ケリー米国務長官が、キューバでの米国大使館国旗掲揚式典に出席後、反体制派を招き、別に私的に大使館公邸で式典を行いました。

2016年3月オバマ大統領がキューバ訪問した際、オバマ大統領は、反体制派と会見を行い、米大使館のレセプション、反体制派も招待しました。その後も米政府は、反体制派への支援を続けたので、8月ホセフィーナ・ビダルキューバ外務省米国担当官は、米国がキューバの反体制派を支援している、この20年間にUSAIDは、反体制派に2億8,400万ドル供与したと批判しました。



2017年、8月、在キューバ米国大使館で「音響攻撃」事件が表面化し、米玖関係が緊迫しました。このキューバ駐在の米外交官への「音響攻撃」（当初、米政府は「音響事件」と呼んでいました）という奇妙な事件は、昨年11月トランプ氏の大統領当選後に発生したものです。音響攻撃を受けた人物は、難聴、めまい、頭痛、精神疾患などの症状が見られるというものです。しかし、現在に至るまで、キューバ側の要求する共同調査を米国政府は拒否しています。さらに、10月米国務省は、「在米キューバ大使館要員（23名）のうち15名に、7日以

内の退去を要求。理由は、「音響攻撃」は、キューバ側の責任であり、在キューバ米国大使館要員を 60%減員することになったので、『相互主義』として取ったもの」と発表しました。米国政府自身が決定した 60%の人員削減に対する対抗措置として一方的にキューバ人外交官の 60%退去を命じるのは、滑稽な理由なき『相互主義』です。

アルドは、タンパに在住し、4月以来過激な暴力行動をとるようになったベネズエラの右翼の破壊活動の支持をマイアミの右派テレビを訴えます (17.12.27 *Cuba Resumen*)。アルデアノスは、解散していますが、米国内の黒人差別の問題、貧困問題をテーマに歌っているというニュースはまったくありません。また、ボジックは、チュニジア、ウクライナ、レバノン、ジンバブエを訪問し、破壊活動を行っているようです (17.12.27 *Cuba Resumen*)。

2018年5月、このドキュメンタリーの共同制作者のシルビート「エル・リブレ」は、キュー



ーバに家族訪問で訪れた際、当日税関で荷物を受け取れず、後日受け取りに行ったハバナ空港の公園で、「ラウル打倒、ディアスカネル打倒、家族に会いに来させないようにやつらはくたばれ、かれらは、キューバ国民を奴隷化している」と叫び、これを制止しようとした公安警察と小競り合

いになりました。その様子を仲間が撮影したビデオをフェイス・ブックに乗せました。いつものシルビートのやり方で、警察の過剰反応を引きだし、抑圧体制だという印象を国際的に広めるものだったと思われます (18.05.06 *Cibercuba*, 18.05.05 *Martí Noticias*)。

歴代の米政権、キューバの主権侵害継続

こうして見てみると、米国は、ブッシュ政権も、オバマ政権も、トランプ政権も、USAID を使って執拗に、いろいろな手段でキューバの反体制活動に資金を与え、支援していることが分かります。

ドキュメンタリーの最後に、「キューバとアメリカの不幸な戦争のせいで苦しんでいる人々のために音楽とこの番組をささげる」という字幕があります。キューバの経済困難、一部の人の政治的な逼塞感をもたらしたのは、米玖間の不幸な戦争によるものではありません。米国のキューバへの内政干渉、主権の侵害による反体制派の資金援助、攪乱行為指示にあるのです。米国から資金援助と反抗の指示を受けた勢力が、自らの責任をかなぐり捨て、問題が両国にあるようにするのは、まったく奇妙な論理です。

現在、キューバ、ベネズエラ、ニカラグア、エクアドルなどの中南米の左派政権に、トランプ政権は、一層露骨な内政干渉、主権の侵害を行っています。本年2月には、ティラーソン米国務長官(当時)は、「われわれはモンロー・ドクトリンの重要性やそれがこの西半球に意味したこと、共有する価値の保持について忘れてる。だから、当時と同様、今日も重要だ

と思う」と公然と述べました。さらに、8月コロンビア政府は、南米12カ国で形成するUNASUR（南米諸国連合）からの脱退を、エクアドルのレニン・モレーノ政権は、ALBA（米州諸国民ボリーバル同盟）からの脱退を発表しました。いずれも、ラテンアメリカ・カリブ海諸国を分断して支配しようという米国の意向に沿ったものであることは明らかです。西半球を自らの勢力圏、「裏庭」と考える米国の思考パターンは変わっていないのです。この米国の復古的な理念を無視しては、ラテンアメリカの状況は、のっぺらぼうにしか見えないでしょう。

（2018年9月2日 新藤通弘）